

なんだか、おかしいぞ？ 沖縄県教育委員会主催、沖縄タイムス社共催による『美術館開館記念フォーラム 沖縄文化の軌跡パート1 文学・思想から考える（2006年11月14日（火）教育福祉会館）』に参加して

2006年11月18日（土） 安座間安司（美術批評家）

11月14日(火)に、那覇市古島の教育福祉会館で開催された県教育委員会主催で沖縄タイムス社共催による「美術館開館記念フォーラム 沖縄文化の軌跡 パート1 文学・思想から考える」に参加した。

ところで、それに先立つ11月10日(金)には、教育庁内(沖配ビル内)で、「沖縄県の美術館に関する支援文化19団体及び賛同有志」に対する教育庁側が設定した「説明会」が行われたが、教育庁の対応の「おかしさ」(以前に上記団体が提出した県知事宛の「美術館に関する公開質問状」が知事に届いておらず、教育庁内で処理されていたことが判明した)に、同団体が不信感を示し、「流会」になった出来事があった。

この件は重大な問題をはらんでいると思われるが、なぜか、その「流会」になった「説明会」の出来事を沖縄タイムスは報道しなかった。タイムス担当記者もきちんと同席していたのにである(県内他紙の「琉球新報」は翌日詳しく報道している)。

今回、そのことがずっと頭にあって、そこに教育庁とタイムスによる「何らかの了解事項」めいたものがあったのではとの疑いを持っていたので、そのようなスタンスで今「フォーラム」に臨ませてもらった(なお、県教育庁と同団体との11月14日(金)の「説明会」の詳細については、次の琉球新報のホームページに掲載されているのでそこを見てもらいたい。

公開質問状知事に届かず 文化団体反発 美術館問題(琉球新報、2006/11/11)

<http://ryukyushimpo.jp/news/storyid-18782-storytopic-1.html>

この「美術館問題について大いに語る会」のブログでも展開しているように、現在、那覇市おもろまちに建設中の「県立博物館/美術館」の「指定管理者制度」をめぐる県行政や教育庁の動きには、これまでも多くの問題点が指摘されている。しかし、報道機関のなかでも沖縄タイムスの、時に県や教育庁寄りともとれる報道のあり方や「あいまい」な扱いには常々疑問を抱いてきた。

今フォーラムの報道にも「おかしな」点がいくつかある。ひとつは、11月7日、8日、14日の文化欄で3回にわたって掲載された識者(フォーラムパネリスト)たちによる寄稿記事において、「美術館」関連のイベントであるにもかかわらず、「沖縄文化の軌跡」というタイトルロゴや寄稿者の名前だけが大きく表示され、「県立美術館に向けて」という肝心部分の表示が極端に小さい点だ。内容に重点を置いたとえばそれまでかもしれないが、その表示のあり方で、この「フォーラム」自体の開催に気が付かなかった「美術関係者」も多かった。実際、当日は参加者もまばらで、会場はガラガラの状態であった(300名収容のホールに)60名くらいの参加ではなかったかと思う。うがった見方をすれば、あまり「関心」をもってもらいたくなかったのかと疑いたくなるほど寂しいものであった。

しかし、翌日15日(水)朝刊でのそのフォーラムに対するタイムスの報道のあり方を見てさらに驚いた。この手の記事では通常みられない1面フロントに堂々と掲載されているではないか。しかもサブタイトルには「文化史に理解深める」と、いかにも「充実した」内容であったかのような帯がついている(添付されている写真には、ガラガラの会場が写らない角度から、パネリストの姿だけが写されている)。さらに、その模様が同紙11月25日(土)に特集されると予告されている。この調子では、どういう内容(特集)になるかも危惧されるが、いくら自社共催とはいえ、あまりに都合勝手な展開ではないか。

実際、記事の内容も、参加して感じた印象とはだいぶ異なっている。また、私たちが10月21日(土)に同じ会場(「教育福祉会館」)で開いた『これでいいのか? 県立の美術館シンポジウム2006』(参加者160~200名)の扱いに比べると、内容についても力の入れ具合についても矛盾を覚えるほど対照的だ。ちなみに、自慢したいわけではないが、私たちのシンポジウムは、「指定管理者制度」=運営方針をめぐる、よ

り重要な問題を、タイムリーなタイミングで提起したものであり、議論もけっこう白熱していたと思う。

シンポジウムの様子

<http://katarukai.ti-da.net/e1105086.html>

シンポジウムに参加した、大手門学院大学の瀧端真理子先生の記事

<http://d.hatena.ne.jp/takibata/20061023>

しかし、それに対するタイムスの報道は、社会面の隅に、これも小さな文字で「美術館シンポ」という程度の紹介である。もちろん「特集」が組まれることもなかった。近々このブログ上でシンポジウムの内容を紹介したいとは思っているが。

結論めいたことから言えば、教育庁と沖縄タイムス社共催による今フォーラムは、参加したパネリストの方々には失礼だが、「おそまつ」としか言いようのないものだった。それは企画した県の学芸員や関係者、タイムスの記者らの反応をみても明らかだった。にもかかわらず、それが大きく報道され、特集まで組まれるというのは正直理解しがたい展開である。

パネリストの発言内容も、これまで新聞紙上で展開されてきたような「文化・文芸批評」の域をでなかったように思うし、それらをおおざっぱにまとめたような印象しか持てなかった。それを司会＝聞き手が何とか「美術」の問題につなげてくれるようパネリストに要請するから、ますますこちなくなっていて困惑する場面も少なくなかった。

パネリストの一人、大城貞俊氏（作家、グループZO 同人）は、シュールレアリズムやダダイズム、表現主義等に言及するも、たぶん時間的制約もあり、今ひとつ要領を得なかったように思う。自身「だんだん（司会＝聞き手に）何を問われているのかもわからなくなってきました」と苦笑いする場面もあったほどだ。

「思想」の立場から発言した屋嘉比収氏（沖縄大学助教授）の内容は、扱っている「素材」（栄野比青年会の「島民ダンス」）が新鮮かつユニークで、それ自体「創造的」で興味深い分析だったが、外から流入されたものを直輸入するのではなく、沖縄風に変形（脱構築？）していくところに独自の文化的創造の可能性を見るところ「結論（?）」は、これまで美術の領域でも幾度か指摘されてきたものであり、特に目新しいものではなかった。そのことについては、屋嘉比氏自身、「逆に美術関係者に聞いてみたい」というようなことも述べていたので、美術批評家の立場からあらためて考えてみたいと思っている。

しかし、屋嘉比氏にいたっても、冒頭で「そもそも、なぜ、自分のような美術の専門家でもないものが、こういう場に呼ばれているのかよく理解できない」というようなことを謙虚に前置きしているので、これはパネリストの問題ではなく、開催者側の企画力の問題ではないかとおもった。いったい、何をどう展開したかったのか、はたから見ていてもよく分からなかった。たびたび「失礼」だが、なんとなく「著名」な講師を集め、後は権威主義的（?）に「おまかせ」か、という印象さえ覚えたほど。実際、パネリストも困ったと思う。

正直、開館を1年後に迎えたこの時点でこういうレベルでは、先が思いやられるというのが率直な感想だが、一番不思議（問題）なのは、「同フォーラムは美術館で展示の解説をしてもらおう"ボランティア"育成講座のために実施された講座の担当講師たちによる」二次的企画であり、その講師には県の学芸員もあっているはずだが、肝心のそれら学芸員たちが「フォーラム」には参加していない点である。学芸員がいたら、まだいくらかは充実（! ?）した展開になっていたと思われるが、なぜ学芸員は参加していないのか。そのことも、ひどく気になった。

また、タイムスの同15日（水）朝刊記事の最後あたりに、「質疑応答では、フロアから美術館建設の行政的、政治的な問題も併せて議論すべきだとする指摘もあった」と記載されているが、それはたぶん私の発言の

ことである。それにしても、「質疑応答」と呼べるほどキチンとした対応とは思えなかったし、時間切れにもついでこうとする"空気"さえ感じられた。

ちなみに、私の質問（指摘？）は、屋嘉比氏の14日の朝刊文化欄で掲載された論評を引用・関連させながら、先週11月10日（金）に、教育庁から「呼ばれて」行った先の「説明会」の様子についての報道（先に述べてあるように教育庁の「不備」で流会になった）が、沖縄タイムスでは報道されなかったことに「政治性」を感じたこと（琉球新報ではちゃんと報道されている）それが、14日（火）のこの「美術館開館記念フォーラム」が教育庁と沖縄タイムスの共催であることと関係しているのではないかということ、さらにそれが、その「フォーラム」でも時折でてきた、政治と文化や思想をめぐる「抑圧」と「差別」の構造を、図らずもアクチュアルな形で現出させているのではないかというものだ。

つまり、「文化」を必要以上に強調し前景化することで、より本質的で深刻と思われる「指定管理者制度」をめぐる「政治」的問題が後景化（「抑圧」）されており、そのことが、図らずも現に「いまこの場所（当日のフォーラム会場）」で起動しているのではないかという趣旨の発言だった（つもりだ）。

実際、私が発言しようすると、司会＝聞き手の真久田正氏（作家）から、いきなり「今日の議題（文化と思想の話！？）と関係のない意見はひかえてください」ということで 発言をさえぎられた（けん制された）。まだ何も言っていないうちから、なぜ「今日の議題とは関係ない」ということが分かるのか、私には分からなかったが、途中で言葉尻をつかまえては中断させようとするので、そのことの「おかしさ」も指摘しながらとりあえず意見をのべさせてもらった。後で考えたら、このブログに、私が「当日参加して発言するつもりだ」みたいなことを書いていたので（[http://katarukai.ti-da.net/e1139730.html - comments](http://katarukai.ti-da.net/e1139730.html-comments)）、教育庁関係者がタイムス関係者がそれを見て、司会＝聞き手に「対応」を指示していたのではないかと思う。しかし、私の意見（質問）は、当日の「文化や思想の問題」とは「関係ないもの」ではなかったと思っているし、結局、そうした（司会＝聞き手の真久田氏の）態度にこそ、「政治的抑圧」のシステムが端的に現れていたのではないかと思う。

さらに言えば、私はこうしたあり方に、昨今何かと「話題」になる行政やジャーナリズムの「倫理性」の問題を重ねてみている。「指定管理者制度」は沖縄においても、実質的な「民営化＝市場競争原理」の導入を迫るものであり、これまでもたびたびその危うさについて述べてきた。これは「憲法改正」や「教育基本法の改正」問題とも通ずる「国家的」政策であり、弱肉強食を正当化するようなイデオロギー形成にもつながりかねない「危うい」ものだと思っている。

だから、この「博物館／美術館」の運営方針をめぐる問題も、そうした問題線上で捉えてきたし、そうしたスタンスで、これまでも県行政や教育庁の関連部署に向け、「開かれた議論の場を」と、新聞メディアやシンポジウムを通して要請してきたつもりだが、これまでのところそれは実現していない。

しかし、今回のような"枝葉的"なフォーラムが開けるのなら（4月にも「もうすぐ美術館」という"枝葉的"イベントが行われているが）、まずはその前に、最も重要で切迫した"根幹的"問題である「指定管理者制度」＝運営方針をめぐるフォーラムを開くのが筋ではないか。私たちは、いつでもそうした「開かれた議論の場」を求めているし、美術関係者や博物館関係者を中心とした「県民」も広く関心をもっている。それができないのなら「政治的意図」や責任の所在を疑われても仕方がないのではないかと思う。

私はいま、11月25日（土）掲載予定の、当フォーラムに対する沖縄タイムスの特集記事が、ここで問題にしているようなことに触れることなく、体よくまとめられてしまうのではないかということに危惧している。